

令和6年産水稻の栽培管理について

令和6年7月
大里農林振興センター
J A くまがや

1 本年の気象と生育状況

6月25日に気象庁が発表した3か月予報では、「気温は平年並みか高い」見込みとなっています。

ほ場をよく観察し、生育状況に合わせた栽培管理を行い、高品質・多収を目指しましょう。

2 今後の栽培管理のポイント

① 水管理

- ・ 分けつの管理
- ・ 中干しの徹底

② 穂肥（追肥）

- ・ 粃数の確保
- ・ 高温対策

③ 病虫害・雑草対策

- ・ いもち病等の防除
- ・ 抵抗性雑草の防除

① 水管理

○中干しまで

- ・ **深水→分けつ抑制** ・ **浅水→分けつ促進**

麦跡の場合は出穂までの生育期間が短いため、浅水管理を行い、分けつを確保しましょう。

○中干し

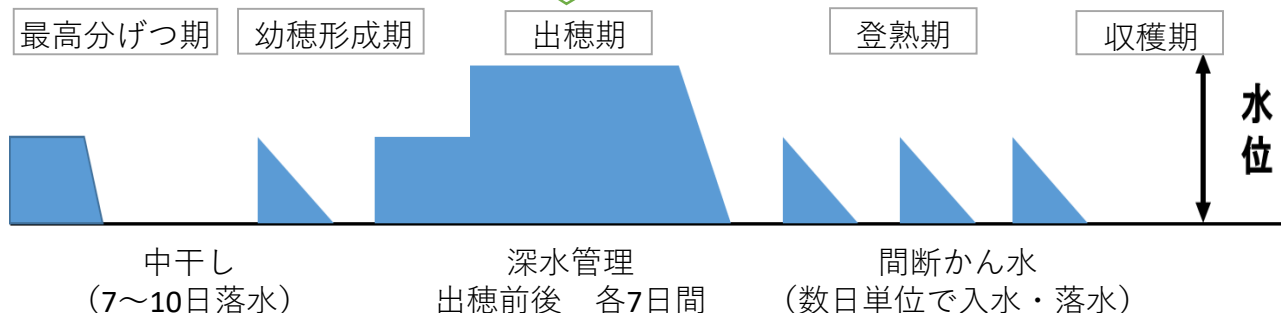
- ・ 開始目安：1株あたり**20本以上の有効茎数**が確認された時点
もしくは田植え30日経過

- ・ 干す程度：田面に小ひびが入る程度まで

（水はけがよいほ場では短めに、悪いほ場では長めに）

- ★効果：過剰分けつの抑制、根の活力維持、コンバイン進入の地耐力確保
→中干しが遅くなり過剰分けつとなると、小米が多くなる原因に。

【水管理のイメージ】



○出穂前後の水管理

出穂前後各7日間は絶対に水を切らさない。

出穂後7日以降は間断かん水で根の活力を維持させる。

落水は出穂後30日以降とし、早期落水は外観品質低下・粒張り不良などを引き起こすため行わない。

○その他の水管理

異常高温や台風などによる強風や豪雨が予想される場合は、出来る限り**深水**とする。

②穂肥

施用するタイミングと施用量は、**幼穂長と葉の色**により判断する。

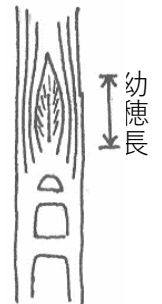
★効果

- ・ 粳数確保による収量の向上
- ・ 体力を維持して高温障害を軽減

品種別の穂肥施用時期

品種		施用時期	標準施用量 (窒素成分)	葉色が「4」 より濃い場合
キヌヒカリ	早植	出穂20日前	2kg/10a	減肥 ・ 施用時期を 遅らせる
	普通	幼穂長2~5mm		
彩のきずな	早植	出穂25~23日前 幼穂長2~5mm	2~3kg/10a	
	普通	出穂25日前 幼穂長0.5~1mm	2kg/10a	
彩のかがやき	普通	①出穂25日前 幼穂長0.5~1mm	①2kg/10a	
		②出穂15~10日前	②2kg/10a	

幼穂長の見方

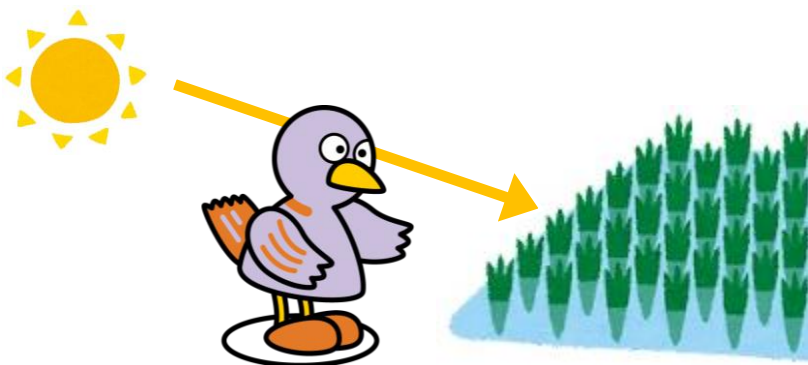


株の中で最も長い
茎を株元から抜き、
カッター等で半分
に割る。

倒伏しやすいキヌヒカリは早い時期の穂肥を避ける。

彩のかがやきは特に高温に弱いので、①の追肥後に葉色が薄い場合は、②の追肥を実施する。

【参考】葉色の正しい見方



葉色の確認は、
太陽を背にして行う。
明るいと葉色が黄色く
見えるので注意！

望ましい測定条件

- ・ 曇天
- ・ 無風
- ・ 午前中

③ 病害虫・雑草対策

薬剤防除と耕種的防除を組み合わせで対策する。

いもち病

低温多湿、窒素過多で発生しやすい。
上位葉に病斑が多いと穂いもちへ移行して
収量が低下する場合がある。
箱処理剤を使用していない方は特に注意！
防除方法：穂ぞろい期までに薬剤散布
周辺雑草の除草に努める
多肥を避ける



紋枯病

密植や過剰分けつで、風通しが悪くなると発生
しやすい。上位葉まで進展すると減収となる。
分けつが多い彩のきずな、彩のかがやきは要注意。
防除方法：穂ばらみ期～穂ぞろい期の薬剤散布
過剰分けつの抑制



稲こうじ病

土壌伝染性の病害であるため、前年発生した
ほ場は注意が必要。
出穂時の天候不順で発生が増える。
防除方法：出穂の21～14日前に薬剤散布
多肥を避ける
選別機により混入を防ぐ



カメムシ類

出穂後に吸汁されると斑点米の原因となる。
出穂前後2週間は畦畔除草を行わない。
→麦後水稻の場合、**盆前の除草はNG!!**
防除方法：穂ばらみ期～穂ぞろい期に薬剤防除
早めの除草作業



防除や草刈り作業時は、熱中症に注意!

こまめな休憩、水分・塩分補給は必須！
単独作業を避ける、家族に作業場所の伝達をするなど、
万が一に備えた行動をとりましょう。

